

140字で読める

アンモラルな
大人のための
ベッドサイド
ストーリー

作 Yumiko Y.

前書き

ツイッターにて公開中（[アンモラルなTW小説](#)）のツイッターノベルの作品集です。

感動系じゃ物足りないあなたに、

絶対感動させず、

シュールな気分に満たされることをお約束します。

全ての作品が140字以下で読めるので、

長文を読むのが面倒くさい、

忙しすぎて長文を読みたくないあなたにピッタリ。

注意： 心臓の弱い方、まじめな方、モラルが高い方、正義感に溢れた方、愛に溢れた方、感動したい方、自分の好きな作品はフォレスト・ガンプだという方、あるいは世の中の的に賞賛されるべきお手本のような心得あるいは性格をお持ちの方は本作品を読むのをお控えください。必ず気分を害します。もしこの警告文を読んでもなお読み進んだ場合、それは自己責任となりますので、ご了承ください。

—真夜中のドイツより

Y u m i k o Y.

第一章： 剣と魔法の世界と現実

その1. お姫様の憂鬱

漠然と助けに来る王子という存在を夢見て早15年近く経ち、

塔に住む姫は今年で30近くになっていた。

美しさに対するプライドから、

王子のスペックに対する要求は年々高くなっていった。

「高身長、金持ち、イケメン以外お断わり」。

いつしか、塔の窓には張り紙が張られるようになった

「鏡よ鏡、この世で一番美しいのは誰？」

「実際は白雪姫ですが・・・

最近はツイッターやBL、アニメにハマりすぎて

部屋に引きこもってますし、

3次元に興味がないので人と会おうともせず、

その美しさが知られる事はほとんどありません。

よって、結果的に、

お妃様、あなたです」

その2. 魔法少女の憂鬱

「マジカルパワー、看護師になーれっ☆」

その魔法少女は、完成した自分の姿を見て眉をしかめた。

確かに一般的な看護師の制服を着ていたが、

それはダサかったし、

ダボっとしているせいで

腰が寸胴で、足が太く見える。

それに白は顔に似合っていない。

彼女は無言で変身を解いた。

そっか、変身しても見た目が9割か！

変身して敵と戦うようになってから1年。

奇妙なことに、

女仲間はできるが、

ピンチになると助けてくれるような素敵な男性は

全く現れなかった。

相棒猫ルルが申し訳なさそうに言う。

「実は、違うエリアで

露出度高めの服で戦う美人戦士がいて、

男はみんなそっちに行っちゃうんだ」

第二章：大人のためのラブストーリーと現実

その1. こだわりが強い人々

あっ、お酒のことではなかったんですね・・・

「俺、ドリンク系はかなりこだわってるから」

職場の憧れの先輩との初めてのデート。

私は緊張しながらカルーアミルクを頼んだ。・・・お子様過ぎ？

「俺はクリスタルガイザー。え、ペリエしかない？

ふっざけんな、俺はそれしか飲まねえって決めてんだよ！」

デートはすぐにお開きになった

付き合ってたまだ数日のカッコいい彼。

コーヒーをよく飲むと聞いた私は、

専門店で店員さんに話を聞いてお薦めの豆を購入した。

詳しくないし、あまり自信ないけど。

受け取った彼は、喜ぶどころか軽蔑するようにこう吐き捨てた。

「僕はね、インスタント飲めるんだよ。

君とちがってね」

その2. ネットでは明るいキャラな彼

彼女の結婚式は、今日だった。

仕事場のデスクで、

刻々と進む腕時計を見て俺は呻いた。

どうして、

この10年という歳月の中、

彼女に本当の気持ちを言えなかったんだろう。

「俺の歌ってみた動画、

本人より再生回数多いんだぜ・・・

なんで、歌わせてくれねんだよォ！

俺にッ！」

その3. わりと体は弱いです。平均の人より
。

「お前に言ったこと、ゼンブ嘘だったんだよ。

ホントは仕事もないし、中卒だし、身長は160なんだ」

彼は靴を脱いで不自然に分厚い靴底を見せた。

「こんなどうしようもねえ俺だけだよ、これだけは本当だったぜ」

私の手に置かれたのは、

彼が肌身離さず持っていた

神経性下痢の錠剤だった

第三章： SFやミステリーと現実

その1. 探偵に資格はないから

「分かった、この事件の真相が！」

少年は突然そう叫んだ。

「なっ・・・それは一体」

「いや、犯人なんていないんだ。

全てが偶然の事故なんだ。

騙されてたんだよ、僕たちは」

次の日、その自称探偵は逮捕された。

「結局、推理と見せかけて証拠を隠滅してたんですね」

後に刑事は語った

名探偵を祖父に持つ彼の強みは、

直々に習った探偵としての処世術だった。

しかし、ここ数年で捜査方法自体に行き詰まりを感じていた。

「最近、犯人がツイッターを使って予告してくるんだが、

どうリプライするのか分からない。

ネットはあまり使わないから、

電話か手紙にしてほしい」

その2. 大学は教授の為の場所じゃありません

2020年、

相次ぐ大学の不祥事を受け

大学に警察を常駐させることが

法律で義務付けられた。

その後、

この法律は大きな雇用創出の機会となったとって

賞賛を浴びることとなった。

なぜなら、

一教授につき一人警察官を付けなければならないほど

職務の需要が大きかったのである

第四章： 学園恋愛モノと現実

その1. ヴァンパイアは学校に行くのが好き

どうしてもテストで勝てない男がいた。

必ず一位になる男。

私ついにその男のクラスを割り出し、屋上に呼び出した。

現れた男は、現実離れした美青年だった。

「テスト？ハッ、もちろん実力さ。

百年前から高校生やってるんだぜ？

逆に出来なきゃ頭マズイだろ」

彼の口からは牙が覗いていた

その2. どうも、「思う気持ち」だけでは足りなかったみたいだ . . .

「お前との約束、破っちまったな」

高校の卒業式の日、

アタシの幼馴染、健太の言った意味が分からず

ポカンとした。

「ゴメン、あれ、嘘だったんだ。

言おうと思ってたけど、

お前の笑顔みたら、なんか言えなくて。

俺、S大落ちてたんだ」

そう言う彼の手には

予備校のパンフが握られていた

第五章： 純文学と現実

その1. 小説なんて、所詮作家のエゴとエ
ゴの . . .

何でもバッドエンドにしたがる作家と

ハッピーエンドにしたがる作家が

リレー小説を書いた。

主人公は借金を苦しんで崖から飛び降り、

彼女は失意のあまり自殺を図ったのだが、

次の章で時空の歪みにより、

全てが正反対の結末となった。

(金が儲かりすぎてしまい、彼女がビッチになる)

その2. 緊急時に対応できないのが人だから

「だよねー」

それが最後の彼の言葉だった。

若くして事故で散ってしまった

親友の最期は、

50歳になった今でも

忘れることができない。

だから、こうして今も一人呟いている。

「だよねー」

と。

アメリカから来た留学生のエディが

一番初めに覚えた日本語は

「寝不足」だったという。

ある日、

キッチンでボヤを起こしてしまったエディは、

駆けつけた消防団に

不注意を咎められた。

そのほとんどは理解できなかったものの、

彼は知っている単語でこう答えた。

「寝不足、ですから。」

アンモラルな大人のためのベッドサイドストーリー

<http://p.booklog.jp/book/43571>

著者 : Yumiko Y.

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/b1immervoll/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43571>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43571>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.